

騎士娘セトラと
魔王の殻



騎士娘セトラは船を降りると
騎士団長に笑顔で歓迎された。

「おお、王国随一の剣士である
セトラ殿に来ていただけたとは。」
「この島には以前にも訪れたことが
あります。…本日をもって王国
騎士団の指揮下に入らせて頂きます。
よろしくお願いしますね、団長殿。」



セトラは元々王国騎士ではなかった。大商人の護衛として王国近辺の盗賊狩りをしているうちに、その功績が認められ国王より騎士の称号を賜ったのだった。なので今でも商人のパトロンの元、自由に活動していた。「船旅でお疲れでしょう。女子寮を用意していますのでしばらくはゆつくりなさって下さい。」
「え……、は、はあ……」

すぐにでも任務に掛かりたかったセトラだが、指揮下に入ると言った手前もある、実際疲労感もあったし、今日のところは休ませてもらう事にした。まあ、明日にでも確認すればいいだろう……。

騎士団の基地は意外としつかりとした造りだった。全体がなだらかに傾斜している島の唯一の乗り入れ口である入り江の側に造られた基地は、しっかりと城壁に覆われており、中は騎士団の館や、ちよつとした市場などもできていた。

セトラがこの島に呼ばれた理由はこんなようだった。一月前、城の魔術士達が膨大な魔力の波動を感じ取った。その出所であるこの島はかつて勇者と魔王が戦った最後の地である。王は騎士団を派遣したがある理由から調査は停滞していた。

——騎士団長は少女騎士に期待しているようだった。色々な意味で。

女子更衣室を物色していたセトラの元に
不意に騎士団長が現れた。彼は不躰を詫びた
後、こんなことを求めてきた。胸を揉ませて
欲しい、と。

（ああ……、一月も男ばかりの島で変になって
おられるのか……。）しばしの葛藤や「いや
……それは……」等のやり取りの後、セトラは
結局了承してしまった。

「おお、なんとふくよかで柔らかい。この感覚、
何時ぶりだろう……!」

たぷん♡

たぷん♡



「おおっ 乳首もこんなに凝って……！
私だけが満足しては失礼ですからな。
ここも弄って差し上げないと……！」
「い、いえ……っ 変な気を使って頂か
なくても結構ですから……っ♡」
妙な展開が結果的に彼女を興奮させて
いるのか、セトラの乳穴や口腔からは
淫液がたぽたぽと溢れてきていた。



「失礼致しますっ……!」
アムツと騎士団長がセトラの乳首に
しゃぶり付く。
「んあっ……♡ そんな……っ♡
だ……ダメです♡ それえ……♡」
じゅぽじゅぽと騎士団長の唇でシゴかれる
程、セトラの感覚が乳首に集中していく。



「か、勘弁なりませんっ！
騎士殿、しばし、しばしその
ままで……っ！」
「え……っ ちょ、待って
それはホントにダメ……っ！」
セトラの言に構わず、団長は
一物を取り出して扱き始めた。



「ふぐっ♡♡♡♡♡」
どぶどぶと胸や顔にまで団長の
精液が飛び散る。

「いいかげんにっ♡♡♡♡♡
頂きたいっ♡♡♡♡♡」

ひととおり精液を浴び切った
セトラは、踵を返すとそのまま
部屋に逃げ去って行った。

だが騎士団長は、彼女が

精液を浴びながらも膣穴から

淫液を噴き出していたのを

見逃さなかった。



翌日になると多くの騎士たちが
セトラを性処理目的で訪ねていた。
どうやら団長が酒の席で皆に先日
のことを触れ回っていたらしかった。

「…別に団長と特別な関係を持って
いた訳じゃないわっ…。くっ いいわよ
アナタたちも私で性処理していけば
いいでしょ…。」



「おお……！セトラ殿の肉厚まんこ、
むっちり柔らかく、中はとろとろ
の汁で溢れておりますぞ……！」

「だめえ……♡ ま、まんこ♡
まんこの中身、のぞかないでえ♡♡」

「なんという蕩けた顔をなさる……、
膣穴を見られて感じておるのですか？」



「ではコレは如何ですか？」
男達はペニスを突きつけた。

「あくっ♡ いやああ♡ そんな臭いの、
近づけないでええっ♡♡♡」



「おおお……っ セトラ殿の体っ
心地よいですぞおおっ！」

「あっ ダメっ♡ ま、まんこにソレ
擦り付けちゃあ……っ♡♡
い、入れないでよっ お願いだからあ♡」



「くっ…♡んあああ…っ♡
精子汁いっぱい出てるっ♡イクっ♡
まんこの汁誤魔化し切れないっ♡」

「精液ひっかけられて、淫液止まらなくなっ
てしまっっっ♡まんこにまで精液
入ってくるっっっ♡」



——いつのまにか基地内の男達の性処理がセトラの役割になってしまっていた……。

彼女は求められれば公然と胸をはだけ、男の一物を挿み込み、扱き上げた。

「ほ、ほら。朝練が終わった者からだぞ。

くっ……♡「こうやっておっぱいとおまんこ肉で

ちんぽを挿み込んで、しこ♡しこ♡

ううう……」



「~~~~っ♡ しゅ♡ しゅ♡ しゅ♡ しゅ♡ しゅ♡
す、すごい量の先走り汁が出るじゃない♡
ちゅぱっ♡ ペろっ♡ うう…すごい味だ…♡
そろそろ本イキしてくれ。次が待ってるんだ…。」

「え…、私もいつしよに乳首オナニーしてるところを
見ながらイキたい…? くう…っ♡ ー、ーっか?
しゅ♡ しゅ♡ しゅ♡ しゅ♡ しゅ♡」



「んひいっ♡んおっ♡んおおおおっ♡♡
出てるっ♡精子びゅーびゅー♡♡イってりゅ♡
とまらにゃいっ♡凄いやないかあ♡♡♡」

「私に全部出して♡
すつきりして今日も
励むんだぞ♡♡♡
んひいいいい♡♡♡」

「……ってちがうつ……!!」

淫液にまみれたまま騎士たちの館を後にしようとした矢先、セトラははっと我に帰った。すでにこの島に来てから一週間近く経とうとしていた。セトラはくるりと踵を返すと、騎士団長が執務をこなしている団長室へと走り出した。

「うーむ……、いつまで引き延ばせるのか……。もう少し予算を……。」

「団長っ!」 乱暴に扉が開く。「私はあなたがたのチンポのお相手をする為にこの島へ渡ってきた訳ではありません! 調査が遅れているその困難を取り除くためにやってきたのです!」

しばらく団長とセトラは見つめ合う。

「ふむ……。ふむ。そうでしたな。私とした事がつい。」 騎士団長は現在までの経緯を説明しだした。

——島の奥へ行くためには森に入る必要がある。狭い獣道を何とか抜けて行く。と森の中ほどに、あるオークが住む山小屋がある。その者が我らの侵入を阻み、どうしても奥にいけないのです。

——そのオークなら存じています。敵対的なのですか？

——いや、そこが難しいのです。彼の者はあくまでもこの奥は危険だから通せない、と。どうしてもと食い下がると、「自分と試合をして勝てたら通してもよい」
と。ですが、まあ、その……—

——セトラは騎士団長とのやり取りを思い出しながら一人、森を歩いていた。セトラがかつてこの島を訪れた時、彼女はそのオークに案内されて魔王最期の地にある、『魔王の殻』を見に行つたのだ。そして過去の勇者に感銘し、彼女が剣を取る理由になった。

オークの山小屋の先は崖になっており、長いつり橋が一本架かっていた。

小屋の横を通り過ぎようとすると、どうやって気付いたのか、小屋の裏から巨漢のオークが一人、ヌツと姿を現わした。

「今日も来たの力。挑戦なら受けてやる。さあ、来イ！」

騎士たちは一応真面目に、挑戦を繰り返していた様だった。

……セトラは勝った。激しい正面からの連撃をおとりとして素早く背後に回り込み彼の首に剣を突き付ける。

「よく見たらあの時の娘っこの力。間違えタ。」

オークは暫く逡巡した後、こんな事を言い出した。

「強き娘ヨ。頼みがある。俺はずっとこの地の番人として生きてきた。だが力の衰えを感じル。心残りは我が血が途絶えてしまふこと。どうか俺と生殖して欲しイ。」

……セトラは了承した。騎士たちに揉まれる中で性に奔放になってしまったのか、彼との打ち合いの中で何か刺激されるものがあつたのか、それは彼女には分からなかった。



セトラはゴロンと仰向けに転がると、
性器を見せつけてオークを誘って見せた。
「お前は勝者ダ。勝者が組み敷かれるのは
変ダ。」と、オーク。何か彼らなりのやり
方があるようだったが、
「勝者は私です。そこまで貴方に合わせる
理由はありません。」
それを聞くとオークは納得したようで
巨大なペニスをずるりと引き出してきた。

「くああ……♡ おおつきい……♡
こんなの入れられたら、私いい……♡」
自分が上に跨ってこの巨大ペニスを
自ら挿入しようとする図など、どう
しても想像できなかった。

「くぅぅぅぅっ♡♡♡んはあっ♡
おっきい亀頭が入ってくる♡
んあっ♡はっ♡入り口の方、
ぐちゅぐちゅ広げられてる♡♡」
亀頭の先で膣内をこねくり回す
動きが、一気に貫けるポジションを
探す動きだと気づき、セトラの
膣肉はさらに深い快感を彼女に
送り込んだ。

「はああぁぁん♡♡♡わ、私の
まんこが♡♡このちんぽに
貫かれる想像をしただけでっ♡
勝手にイってる♡♡なんてちんぽだ
おまんこ♡妄想イキしちゃうっ♡♡♡」

「ふおっ♡ ほおおおっ♡♡♡♡♡んっ♡♡♡♡♡
つらぬっ♡ かれたあぁ♡♡♡ おじちゃんのおちんぽお
おおっ♡♡♡」
『おじちゃん』とは幼いセトラがこのオークを呼ぶ時の
呼び名だった。

今のセトラは、打ち負かせた者に逆に組み敷かれ、
かつて自分をやさしく案内してくれたおじさんに
犯されるといふ、二つの倒錯感をないまぜに
飲み込み、それをすべて性感に変える貪欲な人間
だった。

「さア！ 島の奥、案内すル！」

セトラに種付けを終えたことで、オークは異様に元気になっていた。これが彼なりの賢者の時間というやつなのかもしれない……とぼんやり考えながら彼の後に続いてつり橋を渡り出した。

つり橋を渡っていると精霊たちが襲い掛かってきた。オークの言っていた

『危険』とは主に彼らの事だった。

「魔王の殻が魔力を発してから精霊たちが敏感になってイル。剣に結界を宿し彼らを追い払うんだ！」

空を飛び回る霊たちを散らしていると、橋の向こうに実体を持った人型(?)の精霊が立ちはだかった。

「あの者は古くからこの森に住む精霊だ。事情を知り、協力してくれるかもしれない。」

セトラが剣を下ろし、その動向を見守っていると、精霊はスルスルとセトラに近づいて来た。無数の触手を揺らつかせながら――。

「こ、この者は本当に大丈夫なのですか？
なんというか、すごく不安なんだけど……」
オークは何も語らなかった。

精霊の触手はセトラの体を這いまわると
まずは重点的に彼女の膣や乳首を撫でまわし
始めた。



セトラが抵抗してこないことに気をよくしたのか、精霊は彼女の体中に触手を這わせ始めた。触手が触れた場所がすべて性感帯になったかの様にセトラは穏やかな絶頂を繰り返した。

「はああ……♡ 気持ちちっイイ……♡
イ……♡ イってるぅ……♡ すっごく
まったりした気持ちになるのに……♡
体がイってる♡ 精霊に、癒されアクメ
連発させられてるぅぅ……♡♡♡」



「んっほ♡ おふっ♡ んふう♡」
触手にほだされている内に何も
考えられなくなる。口の前に
触手をちらつかせてやると勝手に
しゃぶり始めた。

「んぶ♡ じゅぶうう♡ じゅるるる♡」
（おい、ひい…♡ 力抜けて…♡ 体中の
お汁♡ おしっこも、全部出ちゃうっ♡）



唐突に股間に違和感を感じた。
膣内をまさぐっていた触手と神経が
繋がリ、膣穴からペニスが生えている
感覚に襲われた。

「んぶううっ♡♡♡」
(いや、ちがうっ♡ ホントに
ちんぽ生えちやつてる!?)
こ、これは……………)



(ぎ)ぼぢいいいゝゝゝ♡♡♡
 おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡
 おぢんぼってこんなに気持ちいい
 のおおゝゝゝ!??♡♡)

(こんな場所で♡ おかしくなつて♡
イキ狂って死んでしまおう♡♡♡)

「これが魔王の殻ダ。」

セトラが目にしたものは幼い頃に見たモノと同じ形をしていたが、以前は石の様に固まっていた。それが今はぬちぬちと肉壁が蠢く口を開けてこちらを待ち構えている様だった。

——『魔王の殻』はかつて勇者の魔法によって大穴を開けられ力尽きた、魔王の体そのものであるとされる。精霊の力溢れるこの島で再起を図ろうとした魔王はこの場所まで勇者に追い詰められ、ついにトドメを刺される——

だが魔王は復活の呪いを仕込んでいたのだった。自らの魂と引き換えに誰もが自分の存在を忘れた時、生命活動を再開する。

魔王の殻に近づく異質な魔力に体を持っていかれそうになった。

それでも正気を保っていられるのは先ほど精霊に塗ったくられた粘液が体を保護しているおかげなのか。

「これは魔王の生物としての側面ダ。おそらく魂までは復活していまい。

だが魔力で守られているナ。精霊を斬った時のように結界を剣にまわせれば刃が通るかも知れない。」

セトラは魔王の殻に刃を突き立てた。しかし剣は肉壁に飲み込まれていき、そのままセトラまで飲み込んでしまった。

魔王の殻から再びセトラが姿を現わした時、セトラは完全に殻に囚われていた。

「か、体中が性器になったみたい感じる♥で、でもコイツを倒せば……っ！
なんとかして……っ」



取り込んだものに攻撃意識がある事を感じ取ったのか、殻はさらに強力な催淫を施してくる。

「くほおおおっ♡♡ おっ♡♡ おお♡♡ コイツ♡♡ 快楽で私を操ろうとしているのかっ♡♡ かひゃっ♡♡ 体が♡♡ おかしくなりゆ♡♡ おかし…く♡」

「え……♡ い、いやあああ……♡♡♡ わ、私におちんぽお♡♡♡ どぶどぶ
気持ちイイ、本物のおちんぽが生えてしまったあああ♡♡♡」

激しい快樂にもがいた時、セトラは気付いてしまった。拘束された手足を
動かすとそれに合わせて殻から生えた触手が動くことに。



「んへええええ♡♡♡♡♡ わ、私♡ 魔王の殻に囚われてるんじやなかった♡♡♡♡♡
私が♡♡♡ 殻を操ってりゅ♡ 自分の意思で♡ 触手操作してりゅうう♡♡♡」

「チンシンコ♡ ザードピュギもぢイイ♡♡♡ ちんぽオナニーで♡ 私自身が魔王に
なっちゃったこと♡ 理解しちゃったああ♡♡♡」



人間の意思を取り入れ、その人間に自らを操らせる外殻。それが魔王の正体だった。かつての勇者も取り込まれた人間を倒すことができて、本体である外殻までは滅ぼすことができなかったのだ。それを理解したところで今のセトラには、殻を操ってより大きな快楽を得る事しか頭に浮かばなくなっていた。

(私はどうすればいいの♡ どうって・・・♡ このおちんぽで♡ 一杯メスをレイプして♡♡ 魔王ちんぽで子作りレイプセックス♡♡ 想像しただけ♡♡ あひひひひひ♡♡♡ ザーメンどばどば溢れるううううう♡♡♡)

セトラの視界の端で、精霊が自身の触手をゆっくり横一文字に動かした。

その瞬間、セトラは自分の本来の腕の感覚——操作している殻の触手ではなく、肉壁にのまれている彼女自身の腕の感覚——を感じ取ることができた。

セトラはふたなりペニスがもたらす強烈な射精快楽に悶えながらも、肉壁の中で剣を握り直し、結界も纏わせ直して——

一週間後、セトラは王国の謁見の間に立っていた。魔王の呪縛から脱したセトラだったが、結局その股間に生えた魔王の痕跡までは完全に切り離すことができなかった。敏感すぎる。ペニスを魔道具の力で抑えながら、国王や大勢の臣下達の前で報告するのは、果てしない羞恥と快樂がないまぜになった時間だった。

「そういう訳で魔力の正体は、んふううつ♡♡♡ 魔王の殻の復活を予期したものだかと思われ…はぁあん♡♡…ます。」

報告を終えたセトラに国王が問いかける。

「して、お主はこれからどうする。大役を果たしたのだ。なんなりと褒美をとらせるが…。」

「では、お願いがございます。褒美としてあの島を我が領地として頂きたい。」

——国王はそれを了承してくれた。セトラの後ろ盾の商人も騎士団の基地をそのまま街にする計画には乗り気だった。

セトラはあの地の精霊やオーク達とこれからについて相談し合った。

多分に生殖活動を交えつつだったが——

おわり





—— 奥付 ——

タイトル: 騎士娘セトラと魔王の殻

作者: handa

サークル: Fの部屋

メール: fnoheyakara@gmail.com























































